

=== コスプレ継母(ママ)・二夜【陸上ブルマー編】 ===

【プロローグ】

「私は四十歳になる人妻……五年前に再婚し、実の娘の他にもう一人、義理の息子ができたのですが……」

「つい一ヶ月前になるでしょうか。実は、息子と……義理の息子と、男と女の関係になってしまっていて……」

「どうして一線を越えてしまったのか、今ここで詳しい経緯は語りませんが……結局、お互いが求め合っていた、その言葉に尽きるとしています」

「もちろん母親にあるまじき愚行だと分かってはいます。いくら義理とはいえ、息子と交わるなどあってはならないと、自らが犯した罪を十二分に理解しているつもりですが、今となってはもはや取り返しがつかぬほど、息子と深い関係になってしまっていて……」

「あらためて言うまでもありませんが、悪いのはすべて母親である自分です。一切の責任は自分の側にあると分かっていますが、でも……私が過ちを犯した、そのきっかけになったのは間違いなく夫の不倫にあると思っています」

「決して言い訳ではありません。紛れもない事実なのです。もし今も夫への愛情が冷めていなければ、もし心も体も満たされていたならば、いくら義理の息子から想いを打ち明けられても、それを受け止めようとはしなかったでしょう」

「実際、ずいぶん前から、義母をひとりの異性として意識していることには気づいていましたし、性的な情念を感じることもありましたが、私は良き母として息子に接し、危ういことなど何ひとつ起こらなかったのですから」

「息子もきっと義母の使用済み下着をマスターベーションのオカズにする、その程度の悪戯で満足していたはずです。妄想の中でいくら破廉恥な真似をしても、現実の世界で義母の体を求めようとはしなかったでしょう」

「しかし、一線を越えてしまった今、息子との関係は際限なくエスカレートしてしまっていて……」

「現在夫は単身赴任、娘はひとり暮らしをしているため、息子と二人きりの生活なのですから当然のこと。ましてや精力も体力もあり余っている思春期の少年です。好奇心も旺盛で、もはや普通のセックスばかりでは飽き足らなくなってしまったようで……」

「もともと息子には倒錯した性癖がありました。いわゆるフェティシズムでしょうか。女性の肌着や匂いへの妄執が強く、裸よりも下着姿、ユニフォームやコスチュームを纏った姿に興奮する性癖を持っているのです」

「そもそも初めての体験からして、着衣セックスでした。息子の願いを聞き入れて、私は、実の娘が学生時代に使っていた競技用レオタードを纏い、それを着たままで交わったのです」

「そして、今日もまた息子に願われて、私は……」

【第1章】

「あら、おかえりなさい」

「キャッ！　ちょっ、ちょっとなーに？　ああん、ダメよ、信吾……こらこら、スカートを捲らないで……んもう、いきなり何なの？　ただいまの挨拶くらいしてちょうだい」

「……え？　ちゃんと穿いているか確かめたかったって？　フフフ、大丈夫よ。信吾に言われた通り、ちゃんとおれを……あのショーツを穿いてるわ」

「そうよ、お姉ちゃんが学生時代に穿いていた陸上用の、サイドに白いラインが入った濃紺のレーシングショーツを……」

「え？　ブルマー？　フフフ、呼び方なんてどうでもいいじゃない」

「そのほうが、エッチ？　まあ、確かにそうかもしれないわね。レーシングショーツより、レーシングブルマーとか、陸上ブルマーって言ったほうがちょっといやらしく聞こえるし、男の子が喜びそうな響きよね」

「とにかく、そのブルマーをちゃんと穿いてるから。サイズはSだからお母さんにはかなり小さめだったけど、もともとスポーツ用で伸縮性がある素材だから、何とか穿けたわ」

「もちろん信吾のために穿いたのよ。分かってるでしょう？　お母さんは信吾の言うことだったら何でも聞いてあげるし、どんな格好でもしてあげるんだから」

「ええ、本当よ。どんなに恥ずかしい格好でもしてあげるし、どんなにエッチなことだってさせてあげる」

「フフフ、いやらしい顔しちゃって……この次はお母さんにどんなエッチなことをしようか考えているのね？　分かるわよ、信吾の顔を見れば」

「ううん、嫌なわけがないじゃない。お母さんとっても楽しみ……でも次は次。今日は陸上用のブルマーを穿いたお母さんとエッチなおママゴトをするんでしょう？　いいのよ、信吾の好きなだけエッチなことをしてごらんなさい」

「それに今日は、お母さんから誘ったんだから遠慮はいらないのよ。どんなに変態なことでも……まあ、信吾はいつも遠慮がないけど……今日はね、お母さんもそういう気分なの。凄く発情しているというか、体が求めているというか……だから、いっぱいしてちょうだい」

「……で、どうする？　すぐにはじめましょうか？　もう我慢できないんじゃない？　信吾のことだから、学校ではずっとブルマーのお母さんのことばかり考えて、オチンチンを硬くして……授業にも全然身が入らなかったんじゃないの？」

「ええ、待ってて。今すぐスカートを脱いであげるから。ブルマーとお揃いのブラトップもあったから着けてみたのよ。お姉ちゃんのだから、かなりきつくて、オッパイがこぼれちゃいそうだけど……でも、これを着けていたほうが雰囲気が出るものね？」

「ほーら、どう？ レーシングブルマー姿のお母さんは……フフフ、どうやら気に入ってくれたみたいねえ？ ええ、そうなの。凄くキツキツでしょう？ お尻のお肉も半分以上はみ出しちゃってるし、それに、ウエストのゴムもこんなにお腹に食い込んでいて……」

「やっぱりダイエットしたほうがいいかしら？ ブルマーが小さいせいもあるけど、ちょっとお肉がつき過ぎよね？」

「え？ このままで？ このままだいいんだ？ ダイエットなんか必要ないって？ フフフ、ありがとう。信吾にそう言ってもらえると凄く自信になるわ……うん、なあに？ 今の体が凄くエッチだから、変わってもらいたくないですって？」

「何だか、ちょっと複雑な気もするけど……オッパイも巨乳だし、お尻も大きくて魅力的？ あら、ここも？ ふーん、男の子はオマンコの膨らみにも興奮しちゃうんだ？ 確かにそうね、恥丘がこんもりしていたほうがエッチな感じだし、オマンコの割れ目も目立つし……お母さんみたいなオマンコを、モリマンって言うのかしら？」

「信吾が魅力的に思ってくれてるなら嬉しいけど、女心としては、やっぱり、もう少しスリムになりたいわ……でも、これから信吾がいっぱいお母さんを愛してくれたら、ダイエットになるかもしれないわね？ だって、いつも汗だくになって、した後はくたくたですもの。かなりの運動量じゃない？」

「さあ、いいのよ、見ているばかりじゃなくて、触ってごらんなさい。この陸上ブルマーの手触りが好きなんでしょう？ 熟女の柔らかなお肉を包み込んだ、レーシングブルマーの感触を楽しんでみて」

「匂いも嗅いでもいいのよ。今日はお仕事がお休みだったから、朝からずっとこのブルマーを穿いていたのよ。ショーツはつけなくて直にブルマーだけで穿いて……だって、信吾はそういうのが好きだったでしょう？ だから、ブルマーを直穿きして、お買い物にも出掛けたわ。その帰りにジムに寄ってエクササイズもしてきたから、いっぱい汗をかいてしまっ……」

「フフフ、もちろんじゃない。エクササイズのときもブルマーを穿いたままで……今日はとくに蒸し暑かったでしょう？ しかも、このブルマーは蒸れやすいから、きっとアソコも……オマンコも、ムレムレになっているはずよ」

「え？ ああ、そうね。もちろんその約束も覚えているわ……うん、したわ。嘘じゃないわよ。ちゃんと5回、このブルマー穿いたままで、アレを……お、オナニーをして、5回、イッたわ」

「だから、汗だけじゃなくて、オマンコのエッチなジュースもいっぱいブルマーに染みこんでいるから、すごくエッチな匂いがするはずよ。信吾好みの、ムレムレでくっさあいブルーマンコになっているわ」

「あっ、そうそう、そういえば、信吾はどうだったの？」

「ほら、今日はお母さんのショーツを穿いて学校に行ったでしょう？ 使用済みの、オマンコの沁みがベッタリついてたショーツを……穿き心地はどうだった？ ん？ 良かった？ でも、ヒップメイク用のシェイプアップショーツだったから、ちょっと蒸れちゃったんじゃない？ 嫌な感じはしなかった？」

「あら、そういうのも好きなんだ？ そうよねえ、男性用とは違ってツルツルした生地で手触りもいいし、オチンチンがピッチリ押さえつけられる感覚も気持ちいいのね？ それに、なあに？ フッフ、タマタマがクロッチにつつまれて、それで？ お母さんの、オマンコの沁みがベッタリ貼りついてくるのが分かって……んふふふ、凄おくエッチな気分になっちゃったんだ？」

「それに？ 今日は朝からずっと勃起していたから？ あらあら、すぐ出ちゃいそうなの？ いいわ、分かった。それじゃあ、お母さんのブルーマンコを楽しむ前に一度お口でしてあげるわね。今日のブルマーはとくに、ものすごくエッチな匂いがしてるから、まず一度抜いておかないと、フッフ、匂いを嗅いだけで射精しちゃうかもしれないから」

「さあ、脱いで……全部よ、全部脱いで、シェイプアップのショーツでムレムレになったオチンチンを……蒸れて、くさーくなったオチンチンを、出して、ごらんなさい」

「あああっ、凄おい、もうずる剥けになってるじゃない……そ、それに、カウパーで先っぽが……亀頭がヌルヌルになって……あああん、いやらしいわ、本当にいやらしいオチンチンねえ……に、匂いも、かなりきつそうよ……じゃあ、嗅ぐわよ、いい？ ムレムレの、信吾のオチンチンの匂いを、お母さん、んう、嗅いじゃうからねえ」

「ふうう、はあああ、ふっはっ、ふっ、ふっ……」

「んふうう……ふっ、はあああ、やっぱりだわ、凄い匂い……オシッコの匂いも少し……はああ、ふう、それに……ふう、ふう、ふう……か、カウパーもいっぱい出たみたいで……はあああ、匂うっ、匂うわっ、凄く匂ってるう、オチンチンがムレムレで……あああん、蒸れチンよ、蒸れチン……ムレちんぽ……ムレムレ、チ、ン、ポお」

「どうれ、タマタマの匂いはどうかしら？ お母さんの、オマンコの汚れで……クロッチの沁みで包まれていたのよねえ？ きっと、こっちも凄おく匂っているはずよ、オマンコの汚れもこびりついて……」

「うっくっ……ふうううっ！ あああ……これ、すごっ……ふう、ふう、ふう、はあああ、強烈だわ。オマンコの匂いとオチンチンの匂いが混ざって……ふう？ それに、んう、汗の蒸れと、

オシッコと……はああ、タマタマの、袋の裏の、汚れた匂いがっ、ああ……目眩がするほど濃いわ、濃くてきつい匂いで頭が蕩けそう……でも、興奮する……ふうう、ふうう、んんふう」

「じゃあ、舐めるわよ、いい？ 信吾の蒸れたオチンチンを、お母さんに味わわせてえ」

「んんう、ああ……むっ、ぢゅうう……レロレロ……」

「ジュルッ……んああ、凄く美味しい……じゃあ、お口に入れるからね、いい？ 我慢できなくなったらいつお口に出してもいいのよ。お母さんが全部飲んで……うん、飲ませて、信吾のセーキを……ザーメンをっ、おおんう、ん、んっ、ぢゅううう」

「……んぢゅう……んぼっ、むぼっ……」

「んんーっ!? んっ……んう……んっ、んっ」

「……んっ、んぐ……んぐ……むぐ……ゴックン」

【第2章】

「ふう、はあ……はあ……いっぱい出たわねえ、相変わらず濃くて、美味しかったわ。どう？これで少しは落ち着いた？」

「ええ、もちろんよ。これで終わrinaわけないじゃない。まだまだこれからが本番なんだから」

「さ、さあ、今度は信吾が、お母さんの匂いを……そうよ、ブルマーで蒸れたオマンコの匂いを嗅いでごらんなさい」

「真下から？ フフフ、そんな風にしてもらいたいんだ？ 分かった……それじゃあ、はい、信吾はここにしゃがんで……自転車に跨るようにすればいいのね？ 信吾のお顔がサドル？ フフフ、がに股でね？ はいはい、股を大きく開いて、ブルマーのオマンコを……ブルーマンコのお肉を、お顔にぺったり着けてあげるから」

「ええ、凄いわよ。ブルマーの表面までグチュグチュに濡れていて……フィットネスでいっぱい汗をかいて、それに、5回もオナニーしたんですもの。お母さんが濡れやすいことは知っているでしょう？ ブルマーの生地が愛液がいっぱい染みこんでいて……」

「そ、それに、あと……お潮、とか……それと、オシッコもちょっぴり染みちゃっているかもしれないわね」

「じゃあ、いくわよ……ほおら、座るよ、いい？ 座っちゃうからねえ、グッチョグチョブルマーのオマンコで……ああん、座るわ、座るのよ、義理の息子の顔に座って……ま、マンコを、蒸れて臭くなったオマンコの匂いを嗅がせるのお……ああ、はっ、はっ、はっ、あああおお！」

「ああん、座った、信吾のお顔に座っちゃったわよ……さあ、匂いを嗅いで、もっと思いっきり鼻をクンクンさせてっ！ ああっ、そうっ！ そうよっ！ もっと嗅いでっ、もっと！ もっともっ！ お母さんのオマンコの匂いを、臭くて恥ずかしいブルーマンコの匂いをいっぱい嗅いでえ！」

「ああん、恥ずかしい、恥ずかしいわ。匂うでしょう、ん？ すごく臭いでしょう？」

「そうよ、そうなの。ブルマーで蒸れちゃったの。一日中ずっとキツキツのブルマーを穿いていたから、ブルマーの生地がオマンコにピッタリ貼りついてきて、ああん、お母さんのオマンコは、ムレムレになってしまったのよおお」

「お母さんって変態よねえ、ごめんなさい、ごめんなさい……でも、いいの？ 変態のお母さんでも大好き？ この、ムレムレの匂いも大好きなのね？」

「うん、なあに？ 言うの？ そうやって言えば、信吾はもっともっと興奮するのね……ええ、言ってあげる……ムレムレのオマンコよ、ムレマンコ、ムレマンコ、ブルマーのムレムレオマンコ、

ブルーマンコよ……レーシングブルマーで蒸れた、お母さんの汚いマンコ……汚くて臭くて、ヌルヌルのオマンコお……ああああ、変態お母さんの、ムレムレブルーマンコっ、おおおん」

「はあ、はあ、あああ、お母さんも我慢できないわ。信吾も舐めて、クンニよ、クンニリングスでお母さんを気持ちよくしてえ……ええ、もちろんブルマーは穿いたままで、股のところを横にずらすから」

「ほら、こっちにきて……信吾はソファの前に座って。お母さんはソファの上でM字開脚のポーズで、こうやって、ブルマーを横にずらして……んっ、と……しょっと……ほおら、見えた？ んふふふ、全部見えちゃったねえ」

「お母さんのオマンコ、凄くいやらしい？ 今日は特に？ そうねえ、愛液でヌルヌルで、テカテカになったビラビラが割れ目から大きくはみ出していて……お母さんのラビアって大きめで、ちょっと下品かしら？ あら、それがいいの？ お母さんの大きいラビアも大好きですって？ あああん、嬉しい。いいのよ、もっと見て、エッチなムレムレマンコを視姦してえ……ほおら、ラビアを広げて中も……思いっ切りラビアを開いて、割れ目の奥まで見せてあげるから」

「フフフ、今って、そういう言い方をするの？ いいわよ、分かった、じゃあ……クパーツて、オマンコの割れ目をクパーツ、クパーツて、ほら、ほおらあん、開く、んんう、オマンコの割れ目が、あああん、クパーツて広がるううう」

「はあ、はあ、見える？ 見えてる？ オシッコの穴も、膣の穴も……え？ ドロドロ？ 白いのがベツタリついてるって？ いやああ、恥ずかしい……汚いでしょう？ 匂うでしょう？ でも、信吾はこういうオマンコが好きなよねえ、そうでしょう？ そうよね？ オマンコの汁で、エッチなジュースでグチャグチャになったお母さんのオマンコが」

「そうよ、こういうオマンコ汁がショーツについて、パンティのクロッチにエッチでスケベな沁みを作っちゃうの……好きでしょう？ お母さんの沁みパンも、信吾はいっぱいペロペロしてたもんねえ？ だから早く舐めて、汚いお母さんのオマンコを、いつものように信吾の口で、ペロで、いっぱいいっぱい虐めてえ」

「そう、そうよ、隅々まで丁寧に、白いべたべたを残さずに……あああん、本気汁の塊も、オマンコ糟も全部ねぶりにとってえ、お母さんのマンカスよ、マンカスを味わってえ……おお、ほおう……おっ、おおうう」

「ほおおおお、あっ、あっ、そっ、そっ、気持ちいい、気持ちひいいい、んっ、んっ、そこ、そこそこっ……クリよ、クリトリスう、皮を剥いて、実を剥き出しにして、もっと舐めて、もっとおお、いっついっつい、んんんう、気持ちいい気持ちいい気持ちいい……ああああ、あっ、あっ！ おっおっおっおっ」

「はあ、はあ、はあ、あああん、やめないで、つづけてえ……もっとよ、もっと割れ目をねぶって、隅々まで舐め回してええ……おっ、おっ、おっ、いいい……そうよ、オシッコの穴も舐めて、穴を舌でほじってええん、そっ、そおう！ いいわ、上手うう、凄く気持ちいい……んんう、

オマンコの穴もしてえ……お母さんがラビアをいっぱい広げてあるから、膣の入り口を舐めてえ、ベロベロ下品にっ、おっ、おっ、いい、いい、ひいい、ひいい、感じるっ、感じるう……はっはっはっ、あああ、んんう」

「ね、ねえ、中もして……穴に指を入れて……二本よ、二本の指でほじってえ……奥よ、奥まで突っ込んで、指マンでいかせて……お母さんの気持ちいいところ知ってるでしょう？ 教えてあげたもんね？ そうよ、この前してくれたみたいに、お潮を吹かせて……Gスポットよ、Gスポットを抉るようにして、いっぱいいっぱい指マンしてっ！」

「激しいのがいいの、分かってるでしょう？ お母さん、激しくされるのが大好きだから、思っきりオマンコの穴をほじってちょうだい」

「あっ、あっ、あっ、あっ、いいい、もっとよ、もっと激しくっ……んんっ、やっ、やっ、やっ、ああああ、出るっ、出ちゃうう、潮……おおお、噴くっ、噴くっ……恥ずかしいっ、恥ずかしいっ、恥ずかしいっ！ イクッ……イクッ……んんんっ！ え？ え？ クリも舐めるのっ!? 指マンしながらクリトリスも責めるのね!？」

「おっ、おっ、んっ、んっ、おおお、感じるう、感じちゃうっ！ いっ……くっ、イクッ、イキそおおお……お、お願いっ、お願いっ、もっとクリ吸って、強く吸ってえええ、あああん、もっとよ、もっとおおお！ 指マンでGスポットを抉りながら、おっ、おっ、おっ、オマンコから取れちゃうくらいに強く吸ってえええ、そうっ、そうっ、そおおお！」

「あっあっあっ、もうダメ、もうダメ……いっ……くっ、イク、イキそうっ！ もっとして、もっとクリトリスを虐めて、お母さんを追い込んでっ！ もっと強い刺激が欲しいの。だから、ね？ クリを……軽く歯を立てて、噛んでみて……ううん、平気よ、平気だからして……最初はそっとよ、そっと……うっ……くっ！ い、いいわ、凄くいい……吸いながら噛んで、噛みながら舌で転がして……ひいい、いいいい、痛いけどいいの、痛いけど感じちゃうのっ！ だからもっとして、お母さんの、パンパンに勃起したクリトリスを強くう、噛み潰してちょうだい」

「おっ、うううくっ！ んあああ、また潮噴いちゃうう……おおお、気持ちいい、気持ちいい、もっとよ、もっと強く噛んでっ、強くうんんんーっ！ クリちゃん噛んで、ゴリゴリって、クリトリスの実を噛み潰してええ、おおお、んんいいいいいい、く、イクッ、イクッ、イクイクイグうう、イググーッ！」

【第3章】

「……はっ……はっ……はっ……あああ、はああ……」

「まだよ、まだ満足できないわ……信吾もそうよね？ オチンチンからまたエッチなジュースが溢れているもんね？ したいんでしょう、オマンコ……お母さんとセックスしたくてたまらないのよね？ いいのよ、させてあげる……ううん、して欲しいの。お母さんも信吾に犯されて、滅茶苦茶にされたいの」

「入れて、すぐに……ほら、こうやって……んっ、と……っしょっと……信吾が大好きな、マングリ返しのポーズにっ……なって、あげるから……さあ、これでいいでしょ？ 真上から入れて。お母さんにも見えるように、真上からオチンチンを突き刺して」

「ほおら、ブルマーをこうやって、大きく横にずらして……え？ ブルマーの上から、入れる？ ブルマーの生地ごとオチンチンを入れてみたいって？ フフフ、そんなことがしたいの？ そんなにこのブルマーが気に入ったんだ？ いいわよ、だったらしてみて……信吾がしたいことなら、お母さん全部させてあげるから……きっと入るわよ。このブルマーの生地ってとっても薄くて柔らかいし、伸縮性もあるから」

「入れるところ、分かる？ ブルマーの生地がピッタリ股に貼りついているから、エッチなオマンコの形もクッキリ浮き出していて……穴は、ここよ。ここが膣の入り口……ほら、ブルマーの上から指を入れて、確かめてみて」

「大丈夫よ。もういっぱい濡れてるし、中もトロトロになってるから、生地ごと指を押し込んでみて……そうね、まずは中指で……ん、んんう……あ、あ、何だか……変よ、変な感じ……だけど、いいわ、凄く……膣の中が生地で擦れて、刺激されて……ああん、直接指を入れられるより気持ちいいかも」

「もっとよ、もっと指を押し込んでみて……そうよ、そうやって捻るようにしながら……あっ、あっ、入る、入ってくるっ、ブルマーの生地ごと中指が……あっ、あっ、ううう、んんんう、おお、ずっぽりよ……中指が根元まで、ズッポリとオマンコに入っちゃったわ」

「さあ、つづけて。今度は二本でほじってみて。オチンチンが入りやすいように、しっかり奥までブルマーの生地を押し込んで……んっ、んっ、んんう……きついけど、平気……そうやってピストンさせると、んっんっんっ！ いいわ、凄くう、ブルマーの生地が擦れて凄く気持ちいい」

「フフフ、いやらしい？ ブルマーの上に窪みができて……その周りにグチュグチュの、白いまん汁が滲んでるって？ フフフ、こんなの見たら、もう我慢できないでしょう？ いいのよ、来て……マングリ返して真上から、お母さんのブルーマンコを、信吾のおっきいおチンポで奥の奥まで串刺しにしてーっ！」

「んiiiiiiii！ いきなり、そんなっ……あっあっあっ激しい、激しいっ……おおお、くううう、い、い、ひiiiiii……ピストンされるとっ、おおう……ブルマが、あああ、生地が引っ張

られて、クリトリスまで擦れて、おおお、最高に気持ちいい！　ねえ、信吾、もっとして、もっと突いて、激しく突いてっ！　奥の奥までズコズコしてえええ！」

「おっ、おっ、おっ、あっ、あっ、あっ、んっ、んっ、んんう、いいい、ひいいい！　擦れるっ、んんう、ブルマ生地で中が擦れて……おっ、おっ、おほおうっ、凄くいっ、いいっ、いひい！」

「んっ、んっ、んんう、ホント気持ちいい……あっあっあっ、ぶ、ブルマーの、おほう、セ、セックスが、こんなに良かったなんて、うっうっ、おっおっ、し、知らなかった、あっあっんっんっんっ、ううん、レーシングブルマー最っ高っ、おおおん、最高っ、最高最高最高っ！」

「はっはっはっはっ、し、信吾は、どう？　どうなの？　んっ？んっ？んっ？　ブルマーのオマンコどう？　んふふふ、な、ナマよりも、いい？　ああん、愛液で、グチュグチュになったブルマーの生地が、いっ、ひっ、いいのね？　最高に気持ちいいのね？　うんっ、うんっ、お母さんもナマより、感じちゃうかも」

「だから、もっとよ、もっと膣を抉ってえ……もっと速く、激しくピストンさせて、オチンチンのカリで、んんう、膣のヒダを引っ掻くようにして、んっんっんっ、ブルマーの生地で、マンコの中をお擦りあげてっ！」

「そっ、そそっ、そこお、おおお、感じる、感じるっ！　じ、ジーツ、スポットおおお、凄いわ、凄いい、凄ひいいいい、やああ、ダメダメッ、そんなに激しくされたら、ひっ、ひっ、ひいい、お母さんのオマンコ壊れちゃうっ、んんう……おっおっおっおっ、んっんっんっんっ……んおおお！　いいのっ、いいのっ、いいから壊して、壊してっ！　お母さんのオマンコをっ、ブルーマンコをぶち壊してっ！　オマンコが壊れるまで嵌めてっ、オマンコを滅茶苦茶にしてっ！」

「ひっ、ひっ、ひっ……おっ、おっ、願いつ、願いつ！　もっと、おっ、くう……奥っ、奥よっ、奥までちょうだいっ！　知ってるでしょ、奥が好きなのっ、お母さん、奥が感じるのよっ！　だからもっと責めて、子宮の入り口をオチンポで叩いてっ、ブルマーの生地で擦って擦って、擦り上げてえええ！」

「おっ、おおう！　きたっ、来たわ……届いてる、奥っ……すごっ、いいひいい！　もっとよ、もっと体重を乗せてっ、勢いをつけて奥まで押し込んでっ、おっおっ、そうっ、そうっ！　犯してっ、子宮も……んっんっんっ、子宮の中までオチンポをぶち込むくらいに激しくっ、ううう！　まだよ、まだっ、もっともっともおおお、子宮口を引き裂いてっ、子宮をぶち壊してえええ、子宮が破裂するまで突いてっ突いてっ突きまくってっ！」

「うああああ、いいいい、ひいい、おっおっおっ！」

「んっ？　出そう、セーエキが出そうなのね？　うんっ、いいよ、出してもいいよ……お母さんのブルーマンコに中出ししてええ。このまま奥で、子宮の入り口に押し当てながら射精しなさい、するのっ、するのよっ、しなさい、しなさいっ！」

「お母さんもイクッ、イクわ！ 一緒よ、一緒にいこう……えっ!? もっと奥まで？ あっ、あっ、ちょ、ちょっとダメッ、ダメーッ！ 入る、本当に入っちゃううう……んおおお！ 子宮に……はひ、る……入る、入るっ、メリメリ入ってきて……んおおお、オチンボが、先っぽが、ブルマごと子宮にっ！ いいいやああ、子宮の中に埋まる、埋まるうう……ダメダメダメえ、こんなのダメえ、狂うっ、狂っちゃううう、おおお、イクッイクッ！ イクから、今っ、今よ！ 出して、出してっ！ お母さんのブルママンコにっ、子宮にいいいい！」

「いやあああ、きもちいい、ぎばちいいいい、子宮イクッ、子宮でイクッううう、もっと犯してっ、子宮口を引き裂いてっ、子宮を突き破ってえええ！ んおおお、またイク、イクイクッ……んおおお、出てるううう、オチンチンが脈打ってっ、んあああ、イグイグう、精子い、いいい、いいいのおおお、オマンコイクッ、イクーッ、んおっ、んおおお、子宮イグーッ！」

「はっ、はっ、はっ、はあ、はあ、はあああ……ふう、ふう……」

「えっ、なに!? ちょっ……まだって、そんな……でも、少しだけ休ませて。お母さんもう限界で……キャッ！ そんな乱暴にっ、ちょっと待って、ちょっとおお、ダメ、ダメダメダメえ、そこは違うっ、そこはお尻だからっ、い、っ……痛……入れるならオマンコにしてえ、お尻は慣れてないの、痛いからヤメッ……んひいい、うっ……痛い……そんなに無理やりしないで、ね？」

「あああん、もう、言うことを聞いて……分かった、分かったから……するならせめてブルマーを脱がせて……ナマならいいから。信吾がしたいならさせてあげるから……ええ、お尻の穴、アナルよ、アナルセックスさせてあげるわ」

「バックから？ うん……ブルマーを膝まで下ろして……なあに？ え？ お尻の穴がいっぱい濡れてる？ フフフ、そうね、オマンコのお汁が溢れてきて……それに、さっき中出しされた信吾の精液も、お尻のまわりにべっとりついているから」

「さあ、いいわよ……お母さんのアナルに、オチンチンを入れてみて……そっとよ、そっとして……うっ！ ううう、あああ、んんう……そ、そんなに強引に……あっ、あっ、や、や、ヤダ、入るっ、オチンチンがお尻にい、お腹の中にズルズル入ってくるううう！」

「うっ、うっ、んんう……んっ、んっ、あっ、あっ……あああ……」

「あっ、あっ、んんう……し、信吾ったら、お母さんのお尻まで、んっ、んっ、せ、セックスの道具にするなんて、あああん、本当に、いけない子っ、おおう……ひっ、ひっ、ひいいい、そんなに激しくっ!? ん？ なに？ あああ、いやあ、オマンコから愛液が一杯溢れてくるの？ だって……だって、こんなっ……くおっ、おほうう、んおう！ んんう……そうよっ、そうなのよおおお、お尻も気持ちいいの。お母さんは、アナルファックでも感じるスケベな女っ、お尻いいい、アナルいひいいのおお！」

「そうよ、そうやって……おおうっ！ 奥まで、突き入れられるとっ、んんう！ 子宮にも、響くっ、ううう、響くのおお……子宮が押されて、裏側から挟られるみたいで、あっ、あっ、あっ、

オマンコ全体が痺れてくる。だからもっとして、もっとガッツリ入れてっ、お尻の肉を打ちつけるように、パンパンッ、パンパンッして、奥の奥までオチンポをぶち込んでえええ！」

「おっ、おっ、おっ、おっ、おおお、いいい……ん？ ん？ ん？ ええ、そうっ、そうよっ、お母さんのアナルは信吾だけのものっ、んおおお……し、信吾の、オチンチンしか知らない、んああ……お母さんの、お尻の処女を奪ったのは信吾なのよおお！」

「だから開発してえ、もっともっと感じるように、お尻の穴をスケベにしてっ、してええ……あっ、あっ、おおお……お、オマンコよ、オマンコにするの、お母さんのお尻の穴をオマンコにっ、いいいい！ ケツマンコよ、ケツマンコって呼べるくらい感じる穴にしてっ、してえええ……ひいいい、やああああ、そおおお、もっともっと直腸を挟ってえ、締めるから、ね？ ケツマンコをギュッと締めるから、もっと腸の膣おおお、ケツマンコの膣を責めまくってえええ、お腹を突き破るくらいに激しして、激しくううう！」

「んおお、そっ、そっ、これよ、これっ、おおお凄っ！ んいいい、凄い凄い凄いつ、んああ、イクッ、イクッ、イグイグイグう、ケツマンコでイグう、イツちゃううう……おおおお、お尻の穴、壊れちゃうう、んんんう！ いいのっ、いいからして、もっと壊してっ、お尻マンコを壊してっ、あああ、またイク、イクッ、イクッ……おおおお、凄いのクルッ、クルッ、んほおおお……イグう、イグう……イグイグイグイグうう！ うほお、おおおお、いいいい……ひいいい……あああ」

「はあ、はあ……ふうう、はああ……どうだった、ん？ よかった？ フフフ、今日も最高に気持ちよかったんだ？ あら、お母さんのオマンコはこの世で一番の名器ですって？ お尻も一番？ お母さんしか知らないくせに、分かるの？ そう、分かるんだ？ うん、ありがとう、嬉しいわ……信吾のオチンチンも、最高に素敵だったわよ……ええ、もちろん、お父さんよりもずっと、ずっと、比べものにならないくらい素敵だった」

「うん、なあに？ 今度？ 今度って、もう次のこと？ フフフ、信吾って本当にせっかちさんなのね……ううん、だめじゃないわ。いつでも、何でもいいわよ……で、今度は何がしたいの？ あら、まだ秘密？ 分かった、楽しみにしてるから。これからお母さんといっぱいっぱいエッチなことしようね」

「ええ、もちろんよ。これからもずっと、お母さんは信吾のオモチャ。お母さんの体は……この、スケベな肉体はぜーんぶ信吾のものなんだから。したいことをしていいのよ……うん、愛してる、心から愛しているわ」

「え？ やんっ、またしたくなっちゃったの？ でも、そろそろお夕飯を……ああん、もう、分かった分かった。いいわよ、きてえ……あっ、あっ、ああん、凄い……ふう、はああ……おっ、ほおうう、いいひい、もっともっとおおお、いいいくうう……んっ、んっ、はあ、あああ……いいわ、いいいい、あ、あ、あ、あ……」

【エピローグ】

「こうして私は義理の息子と……もはや後戻りができないほど深い関係になってしまって……今の私にとって信吾は、息子であり夫でもある、そんな男性になっているのです。この世で最も大切な存在……そう言っても過言はありません」

「もちろん後悔はしていません。むしろ今の幸せを噛みしめているのですが……ただ、唯一の不安は……実の娘の香奈恵が信吾との関係を疑いはじめている、そのこと」

「もちろん私は何ひとつ信吾との出来事を話してはいません。信吾も秘密を守ってくれているはずですが、それでも、私が信吾に、信吾が私に接するときの微妙な態度の変化や仕草、言葉遣いから、それとなく感づいてしまった可能性があります」

「もともと信吾が義理の母をひとりの異性として意識している、そのことを教えてくれたのは香奈恵でもあるのですから」

「あらためて思い返してみれば、信吾の想いを私に伝えてきた香奈恵は、もしかしたらこうなることも予見していたのではないかと、そう思うこともあるのです。新しい夫に不満を覚えている実の母親、その心までも見透かして……」

「この先もし信吾との関係を香奈恵に問われたなら、私はすべてを正直に打ち明けるつもりでいます。香奈恵はきっと母を責めないはずだと、そんな気もしていますから」

「だからといって、あえて打ち明ける必要は無いのかもしれませんが。適当にはぐらかしてしまったほうがいいようにも思いますが……もしかしたら香奈恵も、信吾と関係を……そんな疑惑が脳裏を掠めていて……嫉妬めいた感情が芽生えてしまって……」

「だからこそ香奈恵に信吾との関係を認めさせたいと、危なげな独占欲に駆られているのも事実なのです」

「どうなるうとも構いません。この先もし家庭が崩壊しても、私は信吾と二人で生きていく……そこまでの覚悟をしていますから」

F I N